
高校デビュー失敗したら、変なあだ名をつけられた。

毒弦竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校デビュー失敗したら、変なあだ名をつけられた。

【NNコード】

N8523X

【作者名】

毒弦竹

【あらすじ】

中学時代からの憧れていた箱庭学園に入学した俺、長瀬大樹。なぜ、この学校に入学したか？ 決まっている美人がいっぱいいたからだ！ 一次元の住人と比較しても負けずとも劣らない三次元の女の子たち。俺はここで彼女を作る！

原作を知らない人にも楽しんでいただけるようにしていくつもりですが、話の進行上重大なネタばれを含む場合があります。ご了承ください。

ぷるるーぐ

箱庭学園。
はこにわがくえん。

俺の地元においてこれ以上は無いってくらいの広大な敷地面積を誇り、その生徒数も他の学園の追随を許さない。また文武両道という言葉を地で行くがごとく、数いる名アスリートや著名人を排出している。

当然人気の高い学園で、今年度の受験の倍率は十倍を越えた。箱庭学園の純白の制服を着ることは、地元中学生全員の憧れであるのだ。

そんな箱庭学園の制服に身を包み、俺は姿鏡の前で髪型をチェックしていた。

「つ、ん……右の盛り方が甘いか？」

ハードワックスを指にとり、手になじませて髪型を整える。何せ今日は俺こと長瀬大樹の高校生デビューの日である。ダサくてモテなかつた中学時代の自分とはおさらば。俺はこの高校三年間で彼女を、あわよくばハーレムを築く所存である。

思えばここまでは長い道のりだつた。

この学園を志すようになつたキッカケは、中学二年の時に訪れた学園祭の時だらう。

あの時の衝撃は今でも忘れられない。

校門をくぐるとそこは、見渡す限りの美女、美女、美女！ ここが桃源郷かと錯覚し涙を流したものだ。

当時一次元にしか興味がなかつた俺に、三次元の良さをこれでも

かとばかりに教えてくれた。

ここで生活してみたい、ここでギャルゲの主人公みたいな生活を送りたい、ここでエロゲの主人公のような甘い日々を堪能したい！そんな思いから机にかじりつくくらい必死に勉強を重ね、文字通り血反吐を撒き散らしながら、地元底辺中学から唯一の箱庭学園の合格者になつたワケだ。

「うし。完璧じゃね？」

鏡に映るのは今時の若者といった風貌の自分。丸眼鏡を止めコンタクトにし、髪を美容院で切りセットの仕方を美容師さんに習うだけでこうも見違えるとは。

キモオタ、と蔑まれていた俺はもういない。

チラツと時計を見るとそろそろ家を出ないとヤバい。

鞄を手に取ると、俺は元気よく家を飛び出した。

＊＊

ふろるーぐ

＊＊

あの時の俺はどうかしてたとしか言いようがない。

黒歴史も黒歴史。この年齢になつて黒歴史を更新するなんて思つてもみなかつたぞ……。

フラグを立てようと、手当たり次第に女の子に話しかけてみるも相手にされない。恋愛シミュレーションゲームの主人公とかの口調を真似てみても興味すら抱かれない。当たり前だ、誰がキモオタ上がりの男を相手にするか。この学園にはイケてる男子がそれこそ星

の数ほど居るのに。それに気がついたのは、学園の半分くらいの女の子をナンパし失敗した時だ。

もう色々と手遅れだった。

だから、開き直った気にしないことにした。

ただ、入学して1ヶ月と経たない間に、一つ名をつけられるとは思つても見なかつたが。

「かんちGUΥ。次移動だぞ」

「だあーっ！ その名で呼ぶな人善つ！」

立ち上がりつて俺を呼んだ男を涙目で睨みつける。金髪のガタイの良いイケメン、人善^{ひとよし}善吉^{せんきち}は意地の悪い笑みを浮かべていた。

「なに怒つてんだよかんちGUΥ。早く移動しねえと遅れるぜかん

ちGUΥ」

「いちいち、かんちGUΥ言つなつ！」

かんちGUΥ。

俺につけられた、不名誉かつ情けないあだなだ。由来は言わなくとも分かるだろうが、「勘違い」 + 「男」でかんちGUΥ。

キモオタよりも酷いあだなじやねえか。

そんなあだなをつけられたか、俺は自重することを止めた。いまや告白して玉砕した女の子の数は計り知れない。

また俺の悪い噂が一人歩きしていつたのか、友人と呼べる人間は今の所、この人善^{ひとよし}善吉^{せんきち}くらいしかいない。高校生活のつけから躊躇^{ち躇}なんて、最悪だ……。

手が早い奴らはもう彼女を作つてイチャイチャしてゐるといふの……！

「なんで血涙ながしてんだよ」

「つるせえ、イケメンは死ねっ！ 僕だつて女子とイチャイチャしたいのに……！」

「だつたら、朝早くから校門にたつて女子をナンパすんのを止めたらどうだ？ それだけで大分印象が違うと思うぜ？」

「あ、それ無理。いつかフラグたつかもしんないじゃん？」

戦死率がたかかろうと、女の子へのナンパはまだ続いている。下手な鉄砲数うぢやあたんだよ。めざせ、初彼女！ めざせ、ハーレムマスター！

人善は盛大なため息をついていた。

「……モテたいとか言いつつ矛盾してねえか？」

「気にはんな。それよりも

ズイツと人善に顔を近づける。人善は引きつた笑みを浮かべて引いていた。

「な、なんだよ？」

「お前黒神さんとなぜか知り合いじゃん？ 今度紹介してちょ」

「アホか！」

べしつと殴られた。

割と痛い……コイツ、見かけどおり力あるな。

「ほら、さつさと行くぞ」

「把握」

全校集会。

一から三年までの生徒が体育館に一同に会する恒例のアレである。普段は校長の長つたらしい話だけで、欠伸しながら聞き逃せるのが今日は違つた。

なにせ、生徒会長の就任演説があるからだ。今日この時間のために学校に来たと言つても過言では無いだろう。

「生徒会長就任演説。生徒会長黒神めだか」

司会役の生活指導のハゲオヤジの言葉で、ステージに座つていた一人の女生徒がスッと立ち上がり、威風堂々とマイクの前にと立つ。

「やっぱり美人だよなあ、黒神めだかさん」

意図せずそんな言葉が漏れた。

新生徒会長に就任したのは、俺と同じ学年の十三組の女生徒だ。腰にまで伸びた長く艶やかな髪、端正に整つたアイドル顔負けの面、外人モデルに勝る圧倒的スタイル。

まさに完全の美。ミロのヴィーナスをも超える美貌を持った女の子。あいにく話したことは無いが、お近づきになりたい女の子の五本の指に入る人だ。

黒神さんがマイクを握つた。体育館に集つた生徒の視線が全て彼女に集まる。

チラッと横に立つ人吉を見ると、興味の無さそうな、それでいて熱の籠もつた目で彼女を見ていた。

人吉も黒神さんに憧れる一人なのか？いや、そうじゃないだろう。この日は。

「親愛なる箱庭学園の生徒諸君。貴様達に問いたい」

凛と透き通るような静かな声で彼女は言った。会場のざわつきは無くなり、誰もが無言で黒神さんを見る。

「世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実は適当か？」

やや早口でまくし立てる、一際大きな声で告げた。

「安心しろ。それでも生きることは劇的だ！」

人生は神ゲー。インターネットに書かれていた一文がふと脳裏に思い浮かんだ。

「そんなわけで本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ。学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至まで悩み事があれば迷わず日安箱に投書するがよい」

恋愛に関してだけは相談に乗つて欲しいな。どうすればモテるんですかって。

「二十四時間三百六十五日、私は誰からの相談も受け付けるー」

黒神さんは最後にそう締めくくつて壇上を後にした。

教室に帰るとクラスメートたちは先ほどの演説について熱く語り合っていた。

字面だけとれば、完全に中一病なのに彼女が言いつと途端に言葉が重みを持ち始めるから驚きだ。

頬杖をついて退屈そうにしている我が友人吉に話しかける。

「黒神さんはさすがだよな。完全無欠生徒会長キャラを完璧に分かつてらつしゃる。人前にたつのにも慣れてるしな」

「カツ」

人吉は嫌そうな顔をして上体を起こした。

「ありやあ人前にたつのに慣れてんじゃねーよ。人の上に立つのに慣れてんだ！」

「そーだよ？　じゃなきや一年生で生徒会長なんかになれっこないし」

ひょっこりと顔を出してきたのは、まだあどけなさが残る顔立ちの女の子。あほ毛がフリフリとチャーミングに動いている。

「初めましてかな？　あたしは不知火半袖。よろしくね、かんちG

UYUKUN」

「その名前で呼ぶなつー！」

俺がお決まりの言葉を叫ぶと、不知火さんは一シシと笑った。

初対面のクラスメートからもこの言われよう……転校も考えとか？

いや、却下。桃源郷から去るにはまだ惜しそぎる。UG・回想を百パーセントコンプするまで次のゲームには手を出さない主義なのだ、俺は。

「ん？ 大樹。お前不知火とは初めて話すのか？」

人吉くん、言わんとしてることは分かるよ？ 女の子なら節操なく声かける俺が不知火さんに声をかけてないなんて……って言いたいんだろ？

「ふつふつふ。口リは守備範囲外なのだ！」

俺もえり好みはする。俺が好きなのはボンキュボンの女性らしい人なのだ。断じてこんなちつぱいちゃんちくりんなどではない！

「誰が口リかつ！」

不知火さんに手厳しいツツ「口ミ」をいただいた。はつはつは！ 上目遣いに睨まれても全然怖くないもんね。

「むー。まあそれはさておき、お嬢様は凄いよねー。支持率はぶつちぎりトップの九十八%！ 驚異的な数字だよね」

「それは俺も思つた。まつ、あれほどの美人さんなら当然っちゃ当然だろ」

しかも美貌だけで終わらないのが黒神さんの凄いところだ。全国模試では常に上位をキープ、偏差値は常識を超える九十を記録、手にした症状やトロフリーは数知れず、スポーツにおいてもあらゆる記録を総なめ状態。さらに実家は世界経済を担う「冗談みたいなお金持ち。」

まさに、絵に描いた完璧超人。恋愛シミュレーションゲームで出てくるお嬢様キャラみたいだ。

「お嬢様が当選したってことは、ヒーゼン人吉は生徒会に入るの?」

不知火さんの質問は俺も気になっていた。認めたくないが、この人吉善吉と黒神めだかは旧知の仲らしい。選挙の時も人吉は黒神さんに協力して活動していた。ってことは我が唯一の友、人吉くんも生徒会に入るつことになる。

それは、非常にマズい状況だ。

生徒会は忙しい。必然的に人吉は生徒会にかかりきりになり、俺ともあまりかかわり合わなくなるだろう。そうなると、俺はめでたくばつちの仲間入りだ。

ばつちになること自体は苦ではない。しかし、それが原因でさらになに女の子から敬遠されることを考えると……。

「バジニア青空エンド! ?」

「うおつ! ? いきなり叫ぶなッ」

「あ、悪い。けどマジでお前どうすんの? 生徒会に入っちゃう感じ?」

俺の言葉に人吉は分かりやすいため息をつくと、ガタツと椅子から立ち上がった。そして、ズビシツと人差し指を突きつけてくると声高らかに宣言した。

「俺は絶対! 生徒会には入らない! !」

……えっと。

「人吉ーうしろうしろ!」

俺の言葉に人吉が振り返ろうとするも、後ろから伸ばされた手が人吉の頭をガツチリと掴んでしまい叶わなかつた。

「まあ、そう連れることを言つでない」

「……」

人吉が冷や汗を搔きまくつて面白い顔をしている。まあ、後ろにいた新生徒会長を前に啖呵きつたんだ。自業自得つちや自業自得だな。

ただ、それでも言わせてくれ。

「リア充爆発しろ」

人吉の絶叫が学校中に響き渡つた。

「あーあ。人吉こわーい生徒会長さんに連れてかれちやつたね」「まあ、そうだな」

不知火さんはなぜ俺の机の上に寝そべつてんだ?
しかもなぜ足をパタパタさせているんだ。むむ……口リ娘の思考は読めん。

「かんちGUYクンはあの一人がどういう関係が分かる?」「かんちGUYじゃねえ。俺は長瀬大樹。覚えとけつ」

ただそうだな……。

「主人公と正ヒロイン。ただし、初期関係」

「きやる？ 幼なじみとか恋人つて発展した関係じゃなくて？」

不知火さんはきょとんとしていた。それに苦笑いしながらも続ける。

「幼なじみつてことは今分かつた。でも幼なじみつて関係じゃない。恋人じやねえつてのも理解した。幼なじみ以上恋人未満つてやつだな。長く一緒に居すぎて恋愛感情と家族愛が分かんねーんだろうよ」

だから人吉善吉と黒神めだか。普通なら黒神めだかさんみたいな美人に、俺が声をかけないはずなんてないんだ。けど、人吉と先に知り合つちやつたからなー。

あれは、長瀬大樹^{モブ}が手を出して良い人種じゃない。せいぜい眺めさせてもらひつけどね。

あいつらみたいな関係は珍しいものじゃない。俺にとつて、飽きるほどみてきた関係だ。恋愛シミュレーションゲームで。だからこそ続きが気になる。上手くいくのか失敗するのか。

「ふふん。長瀬クンつてただのかんちGUYじゃないんだね。関知

GUYとか？」

「あん？ そりゃどうこう意味だ？」

不知火さんはやつぱりニシシと笑うだけだった。

第一話「すいません、間違いましたアー！」

放課後、俺は部活紹介の紙を傍らに学園内を練り歩いていた。理由はひとえに部活動の見学である。一般生徒が言えば、なかなか殊勝な心だけではあるが、俺の「見学」よそとは一味違う。見学内容……それは、部活女子の観察だ。

部活動を行う女子たちは普段とは違う顔を魅せる。練習だけに意識を向けた真剣な表情。汗を拭う仕草。苦しそうに息を吐く姿。水を飲むときの唇。

そのすべてが魅力的で魅惑的で神秘的で、俺を魅了してやまない。

そして部活女子の見学では、時々奇跡が訪れる。

普段はガードの高い女子の胸チラパンチラチラリズムの嵐！激しい練習の中で自分の姿を確認する余裕がないのか、あられもない姿を見せてくれるのだ。

いつしか、部活女子の姿を目に収めることは俺の日常となつていて、入学してから今日まで一日たりとも欠かしたことがない。部活の数は多いので、まだまだこの口課が終わることは無いだろう。

「今日はどうにこうかね……」

陸上部、バスケ部、水泳部などの押さえるべき所は何回か足を運んでいる。部活に入る気もないのに何度も足繁く通うのはいかがなものか。ここ最近は、その三つの部活女子が魅力的すぎてローテーションくんで通つてたからな。そろそろ別の部活動にいくか。

「ううん……お、剣道部なんてあつたんだ

部活一覧表を下まで眺めていると、剣道部の文字が書かれていた。
剣道部か…… そそるな。

昨今、剣道部女子のことを題材にした漫画やゲームが増えてきて
いる。学園モノ一恋愛シミュレーションゲーム（ギャルゲ）において
てもヒロインのジョブが剣道部なんてのはざらにある。

ここは、新ジャンル剣道部女子を観察させてもらいますか。
ルンルンとスキップしながら、俺は剣道場へと向かった。

このときの俺が冷静だったなら、或いは気がつけたかもしれない。
剣道部の備考欄に書かれていたことを。

＊＊

第一話「すいません、間違えましたア！」

「おひ、ひいか」

箱庭学園にはありとあらゆるスポーツ施設が完備されていて、中
でも剣道場は伝統ある建造物として大切にされているという。
平等院鳳凰堂のような造りと言えば伝わるだろうか。その歴史の
重圧に負けそうになる。

「ま、やつやと行きましょーか」

たのもーーーと声高らかに叫び重い扉を開と。
まず鼻についたのは煙草の臭い。強烈なヤニ臭さにブレザーの袖
で鼻を覆う。

なんじゃ、ここは！？

剣道部はここで練習しとるのか！？

「うう臭い、臭いよ。しかも何で暗いんだよこの道場。今日はちゃんと活動してんの？」

涙目になりながら恨み言をつらつらと思い浮かべていると、いつの間にか木刀を構えたガラの悪い男たちに囲まれていることに気づいた。

「あ、あるえー？ あまりの超展開に俺の頭はオーバーヒート寸前だよ。」

「なんだ、お前。喧嘩売りに来たのか？」

そう言つて木刀を首に突きつけてきたのは、ガラの悪い男たちのリーダー格のような男。初対面ではあるが、俺はこの男を知つていた。

高三の門司先輩。

学校での立ち位置は不良^{ワル}。つまるところ、俺の天敵だ。

冷や汗がたらたらと流れ落ちる。

「あ、あの～つかぬ事をお聞きしますが、先輩がたは剣道部でいらっしゃいますか？」

「アン？ なわけねえだろ。俺らは不良だぞ」

「ってことは、ここ不良の溜まり場デスカ？ 力タカタと震える手で部活一覧表を見る。『剣道部備考・廃部』。

廃部……廃部！？

顔から血の気がさつと失せていく。

「すみません、間違いましたア！」

バツと頭を下げて、ショタツときびすを返して剣道場を後にしようとしたのだが、入り口は不良によって閉められていた。

「おいおい、逃げるなよ後輩。まあここであつたのも何かの縁だ。楽しもうぜH？」

門司先輩はニヤリといやらしい笑みを浮かべると、後ろのお仲間たちがギャハハハと下品な笑い声をあげていた。

もし俺がウェブ小説とかで出てくる最強系主人公なら、このピンチを簡単に切り抜けられただろう。けれど、俺は生憎とそんな高尚な存在じやない。

ただの一恋愛シミュレー^{GUY}ショングーマー『オタク』で高校デビュ－失敗男だ。困難を打ち破る力なんて持つていない。

困難に対してもう身を縮みこませて耐えるしか手段がないのだ。

肩をおされて無様にも地面にへたり込む。俺はすぐさま頭を抱えて亀のよに丸まり、来るであろう衝撃に備えた。

けど木刀が振り下ろされることはなかつた。何故なら。

「ほう、なかなか手入れされた木刀を使っておるな」

「はあ！？ お、お前誰だよ！？」

顔を上げると、俺をかばうように一人の剣胴着を来た女の子が立っていた。

彼女は……黒神めだかさん。

「なんでこんな所に……？」

助かつたけど、不思議だ。俺を助けに来たわけでは無いことは分かつている。じゃあ、なんでここに？

「大丈夫か？ 大樹？」

「ひ、人吉」

手を差し伸べてくれたのは、我が友人吉だった。素直に手を借りて立ち上がらると、服に付いた埃を払う。

「助かつたよ黒神さん、人吉。でも、何でお前と黒神さんがここに？」

「いや、それがな」

「待て善吉。その先は私が言つ」

黒神さんは「ちらりに背を向けながら、凛と不良たちに言い放った。

「一年十三組生徒会執行部、黒神めだかだ。目安箱の投書に基づき生徒会を執行する！」

「はい……？」

言つてることは格好いいんだが、言つてはいる意味が分からぬ。人吉に助けを求めるつもりでチラッとみると、ため息をついて補足説明をしてくれた。

「あいつ、マニフェストに目安箱の設置つて言つてたろ？」

「ああ、あの二十四時間三百六十五日相談受け付けるつてやつか」「それだ。んで、投書第一号の相談が『三年の不良たちが剣道場をたまり場にして困っています。どうか彼らを追い出してください』『だと。で、あいつがその相談を解決するためにここに来たんだ』

俺は巻き込まれたんだけどな、と人吉は肩をすくめながら付け足した。なるほどじやあ黒神さんが来たのは偶々で、俺は偶々助けられたってわけか。

「俺はなんでお前がここにいるか気になるけどな」

「うい！？ お、俺はアレだよ！ 部活見学だよ！ 女の子を見にこようなんて思っていないぞ！？」

「ああ、そうか」

人吉本当に分かつたんだろうな！？
なんか距離置かれてるけど！？

「チツ。噂はかねがね聞いてるぜ。今を時めぐイカれた新会長さんよッ！」

門司先輩の叫び声で現実に戻される。そうだ、いくら助けられたからってピンチなのは変わらない。

むしろ、俺のせい^{女子の子}で黒神さんが窮地に立たされようとしている。

「ひ、人吉？ 黒神さんマズいんじゃないの？」

「あ？ あーまあ見てりや分かるつて」

人吉に言われるまま、とりあえずは静観を決め込むことにする。

「支持率九十八パーセントか知らねーが、生憎俺は残り一パーセントだぜ！？」

じりじりと不良たちがにじりよつてくる。俺は恐怖から一步下がつてしまつたが、人吉と黒神さんはまるで動じていなかつた。
「、こいつら正氣かよ？」

「制服改造、染髪、装飾……校則違反のオンパレードだな。まあ、私も人のことを言えないが」

黒神さんの次の動作に俺は思わず目を見張った。

いきなり黒神さんが八つに分身して、不良たちの間をすり抜けていった。

な、なんだ！？

いつから現実はナルトみたいな忍者が現れるよになつたんだ！？

「煙草だけは控えておけ。貴様たちの健全な成長を阻害し、何より将来の楽しみがなくなる」

黒神さんの姿が一つに重なつたと思えば、彼女の手には煙草の山が積み上げられているではないか。

「忍法……か？」

「ちげえよ。あれは剣道の基本。送り足と繼ぎ足を使つただけのただの運足だ」

「はあ、じゃあ剣道やつてるやつはみんなあんな感じなのか？」

「それもちげえ。ぶつちやけ、あんなこと出来んのあいつくらいだ」

俺は、黒神さんのことを見間違つていたみたいだ。十三組は異常な生徒の集まりだと言われるが、まさにその通りなのかもしけない。

「まあ、可愛ければいいか」

あまり深く考える問題じゃないだろう。そういうしていける間にも事態は動いていく。

「荒れ放題だな……よくもここまで学園施設を荒廃させたものだな」「なんだ、説教かッ！？ お呼びじやなんだよ、会長さんよオ！」

たかが煙草を奪つただけで改心する不良たちではなく、彼らはわめき散らしながら黒神さんを睨み付けた。

黒神さんは口元を扇子で隠し、不良たちの視線を一挙に受けようと落ち着いた凜とした声で場を支配した。

「哀れなことだ」

「なに？」

「貴様たちもかつては真っ直ぐな剣道少年だと決まっている。何か重大な理由の末に貴様たちは道を踏み外してしまったとしか考えられん」

不良たちは予想の斜め上を行く言葉に畠然とし口をあんぐりと開けることしかできていなかつた。

かくいう俺も同じようなものだ。どうして彼女はあんな解釈が出来るんだ。あの不良たちはただのヤンキーだろうに。

「出たよ、あいつの真骨頂『上から田線性善説』」

「人吉、なんじやそりや」

「まんまだよ。他人のいかなる悪行も、環境とかのせいで仕方なく行つてゐるつて思つてんだ。そして、質の悪いことに」

人吉は深いため息をつくと憐憫の眼で俺をみた。

「覚悟しとけ、ああなつた以上俺もお前も巻き込まれる」「え、それつて」

どういう意味、とは続かなかつた。

「私が更正させてやるー。まずは素振り千回から！ 貴様たち今日
は帰れると思うくなつ！ 善吉も長瀬同級生も参加するようになつ！」

は、
はい！？

三度の食事に迷惑が嬉しいから。」
そんなのつて、そんなのつて。

不幸だ——ッ！！

口を動かす瞬あれは手を動かせ
長瀬同紹生！」

ケソ、黒神さん！

「人吉へお前なんでそんなうごけんだよ」

「氣色悪い声出すなッ！」
「お前が貧弱すぎんだよ！」

翌日、筋肉痛で体の節々が悲鳴をあげながらも学校に登校した俺はなんとか昼まで生き延びることが出来た。

るが涼しい顔で昼飯を食していった。

「君たち頭悪いの？ なんでそんなんになるまでお嬢様のじいさんにつきあつたの。あ、長瀬クンハンバーグいただきつ！」

一緒に席に着いていた不知火がヒヨイパクと俺の頼んだハンバー

グを飲み込んだ。お前の前に沢山皿があんだろ！　という叫びは彼女の咀嚼の音で無いことにされた。

「ほんと馬鹿。お馬鹿さーん」

「つるせえ」

人吉は苛つきながら飯をかきこんだ。

「昔からあいつはどつかずれてんだ。だから、あいつには一生かかってもわからんねーんだよ。努力が実らねー奴や訳もなくへこんじまう奴の気持ちをよ」

なまじ優秀だけに、か。長年つき合ってきた人吉が言つのだから間違いはないだろうが、俺の培つてきた常識がそれは違うと告げてくる。

どのようにかは言葉じやいい表せないが。あえて言つなら、黒神めだか彼女は他人を理解している。

「あいつらもあんなヒデヨに遭つたんだ。もう剣道場には近づかねえだろ」

「あ、そりや違うぜ？　あいつら絶対今日の練習に参加する」

「は、なんでだよ？」

「黒神さんが美人だから。少なくとも、俺はそれだけのために練習に行くぜ？」

「……わけわかんねえ」

人吉は味噌汁を飲み込むと、そのまま席を立つた。

「お、おい待てよ！」

俺も急いで白米をかき込むが、噎せてしまつ。

「あひやひや じゃかんちGローケン、お先へ」

「不知火、お前まで！」

畜生、俺に友達はいねえのか！

第一話「見たくないじやん？」

そのままさるすと時が過ぎ、重い体を引きずりながら剣道場にと向かう。

人吉はどうせ誰も来やしないって言つてたけど……。

「おっ、やつてるみたいだ」

剣道場から聞こえてくる声と竹刀の音。さて、と黒神さんには会いに行こう。

扉を開いた瞬間、俺は言葉を失った。

* *

第一話「見たくないじやん？」

「おいおい、何の冗談だよ……」

門司先輩、宇佐先輩、鳥栖先輩、伊万里先輩……どうして、血だらけで倒れてるんですか。

「まったく、僕は生徒会に雑草の駆除を頼んだんだ。増やしてどうするよ」

そんな咳き声が聞こえると同時に、俺の胸に鈍い衝撃が走った。まさに一瞬の出来事だ。

うめき声をあげて、俺はその場に膝をついて倒れてしまふ。うまく呼吸ができない。それでも、顔をあげてみると返り血で汚れた男が冷酷な目で俺を見下していた。

「ひ、日向」
ひゅうが

「やあ、かんちGIOYクン。君までいるなんて予想外だつたよ」

クラスメートの日向はメガネをクイッと掛け直した。
クソつ、似合つてゐるなこの野郎。イケメン爆発しろつ！
つか、超イテエ！ アイツどんくらい腕力あんだよ。

「聞いてくれよ、かんちGIOYクン。僕は眞面目に剣道したい、眞面目で眞面目な男なんだ」

「……」

ビジギのラスボスちっくに日向は聞いてもないのに自分語りを始める。

「だけど僕、団体行動とか上下関係とか苦手なんだ。先輩とか顧問とかと揉めちゃって、いつもボコッちやうの。それで試合でれねーの」

はあーあ、とわざとらじいため息をつく日向。彼は手に持った木刀を門司先輩に投げつけた。

「グツ」

先輩は苦悶の表情を浮かべた。

先輩を心配する余裕は俺にはなかつた。

ようやく胸の痛みがひいてくる。冗談じゃねえ、これ以上つき合

つてらんねえよ。基本的に俺は痛いこと辛いことは嫌いだ。越えられない壁があれば周り右、をモットーに生きている。昨日は黒神さんがいたから別だつたけど、今日は見たところ黒神さんはいない。この先輩たちにも思い入れも特にない。日向が自分語りしてる間にとんずらあるのか……。

「でも計算外。休部中の剣道部があるつて聞いてこに来たのに、立派な剣道場には招かざる先客が！」

落ちていた木刀を拾い上げると、構えた。いちにのせん、で逃げ出せ。あいつも逃げる奴を追撃するほど悪じやねえだろ。そんじやいくぜ。

「だから例のバケモン女」と生徒会長に草むしりをお願いしたんだけど、いやいやつまく運ばねーもんだな」

こり、こりのこり

「まつ、こんなに道場をキレーにしてくれたのはありがたいかな？」

……わふー！

「じゃあ君たか、わざと帰ってくれない……グッ！」

あれ……？

逃げよつとしたのこ、びつじて俺は立ち上がりて日向に携帯ゲー^Pム機投げつけてんだ？

「かんちGコソクン、どうこうつもりだい。痛い目みたいのか」

顔を般若のように変化させ、射抜くような視線で凄まれた。

「う、うるせえな！ お前の突きのせいで胸ポケットに入れてたこ
れ壊れたんだ！ 弁償しやがれ！」

え、えーと。なぜ俺の口はこんなことについてやがりますのでしょ
うか。

脂汗がたらたらと滝のように流れてくれる。
日向が鬼のような目をしている。

「ハ、ハハハ！ 怖すがる！

「どうにつけりもりか、説明してもおひつか

じうこつもりだ、つて俺が聞きたいわっ！

俺はただのハーレム願望ありのゲームだ。こんなキチガイに立
ち向かっていく主人公じゃ断じてねえ。

なんで膝が笑うような目にあつて今までこんなことしないといけな
いんだよ！

俺が女の子のため以外に動くなんて、珍しくないか？

……いや待て。ああ、なんだそういうことか。

「不良の先輩がたに味方してる訳じゃないし、痛い目にはあいたく
ねえよ。ただなあ、コイツらが帰っちゃえば黒神さんの頑張りが無
駄になつちやうじやん。したら、黒神さん悲しむじやん？」

俺はや、ゲームとかでも弱いんだよね。

「女の子の悲しむ顔、みたくないじやん」

鬱シーン。

場を盛り上げるために必要だと思うが、プレイする度に胸が締め付けられる。そんなのを、現実でも見なきゃいけないのか？

答えは否、だよな！

「おいおい、後輩……一人だけかつこつけんなよ。たつた今思い出したわ。俺だつてな昔は剣道少年だつたんだ！！」

「そういうや……俺も」

「俺も、俺も」

不良の先輩がたがよろよろと次々に立ち上がる。……なるほど、先輩がたも俺と同じ気持ちか。
なんというか、俺オタクでも先輩不良と分かりあえるんだな……。
といつても。

「つたぐ、どいつもこいつも……半殺しにするぞ！？」
(どんなにかつこつけようが、怖いもんは怖いし痛いもんは痛いんですけどねーっ！?)

心の中で涙を流す。情けなさすぎ、俺。でも力で打ち勝つほど強くないし。

現実は非情である、まる。

「あんたら剣道三倍殴つて知つてつか！？ 僕はあんたらの三倍強いつて訳だつ！」

日向が木刀を振り上げた。

あー畜生、アレ喰らつたらイテエよなー。かつこつけなきゃよかつた。

俺は目をつむった。だけど、木刀は振り降ろされることはなかつ

た。

日向が驚きの声をあげた。

「ひ、人吉！」

「無刀取りは無理つと。たりめーか」

頭に包帯をつけた人吉が、後ろから日向の木刀を片手で押さえつけた。

カツコイいなあ、人吉め。

だけど、助かった。ありがとよ。

人吉が来たことによつて緊張の糸が切れたのか、俺は決着を見ることなく氣絶した。

俺の精神力の低さなめんなよ？

恋愛シミュレーションゲームでもエンディングのあとには後日談つてのがある。ファンディスク FDとかに収録されてたりするやつだ。
後日談 さて、今回の事の顛末をを話すとしよう。

人吉と日向の戦いは、人吉のワンパンで決まつたらしい。

日向は人吉に負けたくらいで改心することはなく復讐を誓つたらしいが、黒神さんに可愛がられたのだとか。哀れ日向、合掌。

そんな苦節余興あつて今彼は剣道部（仮）の指導を務めることになつたんだと。先輩も日向も互いに認めあつてはいるが、喧嘩は絶えないらしい。喧嘩するほど仲が良いつて言つしな、別に問題ないだろう。

まあいわゆるハッピーエンドだな。めでたしめでたし……とは言えない。

俺が恐れていたことが起きてしまったのだ。
なんと人吉善吉が、生徒会庶務として生徒会入りしてしまった。
付き合いは今でも変わらないが、ただつるむ時間が激減してしまつた。

つまりどうこうとかと申しますと。

おめでとう 長瀬大樹 は半ばしつに進化した！

「なんでやねんっ！－！」

誰かにとつてのハッピーエンドが、必ずしも他の人間のハッピー
エンドにはならないことを知った春の一ページだった。

第三話「たゞ着いてみせるー」

最近の日課は専ら陸上部で行っている。まだ全部の部活女子を見て回った訳ではないが、水泳部・陸上部・バスケ部は毎週一回以上は通っている。

なぜなら、それらは男なら誰もが一度は憧れたことがあるであろう部活女子トップスリー。三強の名の通り、女子のレベルが高いこの箱庭学園でも選りすぐりの女の子たちが在籍しているからだ。

そんな女の子たちがハアハア喘いでいる仕草や、汗を拭うときに見える鎖骨を見ないバカがどこにいる！

「ねえ、アイツまた来てるわよ

「ほんと。気持ち悪いたらありやしないわ」

おい、そこな女子。自分らは聞こえなにように小声で話しているつもりだろうが、もう聞こえてるからな？

罰としてお前らは今日俺の夜のおかずになるのだ！

鼻息荒くグラウンドを見渡す。まだお皿当ての人は来ていないみたいだ。

「あー、今日は来ないのかな」

「三年生入られましたつ

「こんちはーー」

おー、来たみたいだ。下級生たちに頭を下げられている五人組の三年生。その一番右にいる、ショートヘアでお皿が釣り皿の女子。

「諫早先輩っ！ 今日も頑張つてください！」

ベンチの上に立ち上がり、諫早先輩に向けてエールを送る。
諫早先輩に俺の声が届いたのか、彼女はずつこけるとこちらを睨
んできた。

いいねーそそる表情だ。キャラリー脳内に今の顔をインプットする。

あの先輩は、俺が初めて陸上部に来たときから目を付けていた人
だ。

凛々しくて、かつこ良くて、可愛らしい。ふつうなら有り得ない
ことではあるが、彼女は可愛いとカッコイイの一律背反をモノにし
ている。

ほんと諫早先輩みたいなひとつつき合つてみてえよな！

＊＊

第三話「たどり着いてみせる！」

＊＊

諫早先輩を眺めてニタニタしていると、後ろから肩を叩かれた。

「あん？ 誰だよ……って、人吉か。放課後に珍しいな」

俺の肩を叩いたのは人吉だった。

最近は生徒会に入つてしまつたからから、放課後に人吉とあうな

んて珍しい。

人吉は何ともいえない表情をして、頬を書いていた。

「あー大樹。一応聞いたくけど、お前なんでこんな所にいるんだ?」「はあ? お前俺の日課しつてるだろ? なんで今更」

いやがる人吉を連れて何度も一緒に日課を行つたことがある。放課後に俺がなにをしてるかなんて、一目瞭然なのにわざわざ俺に聞く意味が分からぬ。

人吉はだよなー、と頭をガシガシと書くと口をもじもじさせて何か言おうとして言葉を飲み込んだり、拳動不審な態度で考えごとをしている。

なんなんだ、一体。人吉の意味の分からぬ行動に辟易とすると、グラウンドにホイッスルの音が鳴り響いた。

陸上部がトラックを走る合図だ。

人吉に背を向けて、俺は彼女たち走る一挙一動を見逃さないよう全神経を集中させようとしたが、人吉が視界を遮ってきて、あえなくそれは中断せざるを得なかつた。

「人吉、見えないから退いてくれよ」「いや、なんというかそれは出来ない」「はい?」

人吉は再び乱暴に頭をかきむしる。

「カツ! ダメだ、言葉を選ぼうとしたけど俺には無理だ! だから单刀直入に言うぜ? 今後一切お前に日課をさせない!」

「な、なんだつてーー!?」

バカな、そんなつ！

人吉、お前はどれだけ俺が日課に命を賭けてるか知つているだろ
うに。なぜだ、なぜそれを止めさせようとするのだ！

「生徒会宛てにな、お前の日課に迷惑してゐつて女の子からの投書
が山のよに積み上がつていたんだ。そこで俺がお前に行行為を止め
させるように派遣されたつてワケだ」

「迷惑はかけてない！俺はただ部活見学していただけだ！」

「……その発言はアウトだ」

人吉は首を横に降つた。

「これ以上続けようつてなら、俺は実力行使にでるぞ」

右足を一步引いて半身になると、準備万端とばかりに人吉は戦闘態勢に入った。

しないたゞ

卷之三

「美」は感一

今がその時だッ！

両手をブンブンと回して俺は人吉に挑みかかった。

結論。

そりや負ける。

翌日、青あざをたくさん作って教室に入ると人吉が何食わぬ顔でパンを頬張っていた。

俺に気がついた人吉がおうと手を上げてきたので、俺もお返しにとばかりに親指を下に向けて挨拶を返した。

「誰かさんのせいで顔がいてえな」

「そうか、でもだいぶ見れる顔になつたな」

お互にメンチを切りあつた。

あー、畜生。俺が強かつたらこんな怪我を負わなかつたのにな……。心中でため息をつきつつ、俺は人吉に指をつきつけた。

「お前も昨日ので懲りたろ?」

「昨日のアレで懲りるような男じやねえ!」

「……それ、言わなかつたら俺は止めなかつたんだけどな

「……しまつた!? くそ、誘導尋問か!?!」

汚いぞ、人吉!

う一つと唸つてみせると人吉は苦笑していた。今日も人吉が邪魔しに来る……なんという悲劇だ。いや、待て。ひょっとしたらコレは試練なんじやないか?

今までが簡単に日課を行えてただけで、これからは試練を越えなければ望むモノは与えないという神の警句。……なるほど、俺の決意を問うて いるのだな。ならば田を見開いて見てろ! 俺の決意をつ!

「おはよー人吉。……なんでかんちGIO君燃えてんの?」
「不知火か。さてな、時々俺はコイツがよく分からなくなる」「人吉つ！俺はお前を倒し必ずや理想郷にたどり着いてみせるー」「なんの決意だ……」

ピンポンパンポン。

『一年一組、長瀬大樹。一年一組長瀬大樹。至急職員室まで来い』

……校内放送で俺の名前が呼ばれた。はて、何がバレた？

「お前、何やつたんだ」「……心当たりがありすぎて」「多分今朝のナンパのことじゃない？」「ナンパ？」

何してんだお前、という目で見られた。
うぐつ……なんか蔑むような目で俺を見るな。

「嫌がってる女の子にしつこく絡むから……」「あれは恥ずかしがってるだけかと、って何で不知火が事の顛末をしつてんだ？」
「あひやひや、どうしてだろううね」

うししと笑う不知火の頭に悪魔の耳を幻視した。

『長瀬大樹、至急職員室にー』

うぐつ。

確實に怒られるパターン……俺は意氣消沈しながら、職員室へと

向かつた。

すれ違う生徒たちから突き刺さるような視線を浴びながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8523x/>

高校デビュー失敗したら、変なあだ名をつけられた。

2011年11月5日21時14分発行